

其 其 其

遠くを眺める

津守 真

私がM郎と出会ったのは小学校一年生のときだった。
M郎は、一人でブランコに乗っていた。その寂しげな姿が私の気をひいた。こ
う最初の印象が何にもとづくものなのか、後になって次第に明らかになってくるこ
とがある。M郎のその経過について記したいと思う。



遠くを眺める

寂しげな印象をもつと、人は折りにふれてその子を注意深く見るものである。M 郎は高いところののって、遠くを眺めていることがしばしばあった。何を眺めているのか。足元には良いものがなくて、どこか遠くに幸いがあると思っっているのではないだろうか。

水の流れ

M 郎は水の流れに関心があった。大人がバケツをもってきて水をいれてあげると、M 郎はたらいのなかで絵の具をいじり、バケツに手をいれて水をこぼした。色水が流れる。水の流れが滞るところを私が流れるようにすると喜ぶ。

ある朝、物置の上に乗っていたので、私はそばに行った。向かいの建物の屋根から遙か遠くを見ているみたいである。すぐに私に肩車を求め、流しに行き水を出した。そしてホースをとって、ながしの外に向けた。私はバケツで受けて水が部屋の中に入らないように防いだ。M 郎は水をどうしても外に出したい。私が砂をM 郎の身体にかけると次第にそれが面白くなった。M 郎はそれまで幼児期に砂遊びや水遊びをしたことがないのではないかと思われた。

しばらくやってから、ドライエリアに出る扉に走って行き、からめてある針金を敏

耳 花 耳 花

速にほどいた。門の外に出て行きたいのは明らかだった。自分の目的を達するために知恵をはたらかせることに私は驚いた。こうしてM郎とかわわって、ひとつひとつの時間が面白いと、午前の一時間以上が私には一瞬に思えた。

それから私は折りにふれてM郎の傍らで過ごした。私がそばに行くと、M郎は私の手を握ってはなざなかつたり、私に体をすりよせてきた。M郎は大人と外に行くことを好み、私はときどきM郎と公園に行った。

公園の朝——林の中の音と光

ある日、私はM郎と学校の隣の有栖川公園に行った。M郎は自分でどんどん走って公園のなかに入り、水の流れに直行した。学校の庭の小さな流れではなくて、ほんものの小川の飛び石を何度も往復した。じっと流れを見る。小川から池のほうを見ると視野が遠くまで広がる。晴れた空、冷気が肌にふれる林、木の枝の間から日が射す。小鳥の鳴く声、水の落ちる流れの音、鶏のときの声、M郎は、木の葉を拾って耳のわきにあて、指先でもむ、私も同じようにしてみると、微妙な音が聞こえる。教室でもよくブロックを耳のそばで打ち合わせたり、音を聞いているのを思い出した。午前の公園は、耳をすますと、小さな自然の音に満ちている。丁度、生後半年にもならない赤ん坊が、窓の外の小鳥の泣き声や台所から聞こえる母親の包丁の音に、静かに耳を



傾けて楽しんでいるのに似ている。自然の静かな音は、人の心の故郷である。この自然の中にいるときには、子どもは周囲の世界を信頼するに足るものとして認識するであらう。

通りすぎる人々

M 郎はときどきじっと立ち止まる。私も一緒に立ち止まる。昼近くなった公園の通路は、いろいろの人が通りすぎる。フランス人の母親と幼児、幼稚園の子どもの行列、保育園の子ども十人くらいを一人の先生が連れて通る。その中には、流れのそばで、ゆっくりと立ち止まりたい子どももいるだろう。先生が手を引いて急がせる。子どもたちはM 郎を横目で見ながら行く。鞆を持つ紳士、老夫婦、掃除のおばさんなど、次々に人が通ると土埃がたつ。そのあと若い紳士が通りすぎるとき、ハンカチをポケットから出して鼻を抑える。M 郎は土埃など平気である。そういう人たちとすれ違いつつ、立ち止まったり、歩いたりわずかの距離の坂道を何度も行ったり来たりした。こうして十二時くらいまで、平穩に過ごした。静かな秋の午前だった。

よその人たちの視線

M 郎と私は坂の上の砂場に行った。私は二、三人の親子と一緒に砂場の縁に座って



いた。M郎はそこにあつたふるいに砂をいれたり、ときどき立ち上がって砂場の中を歩いたりした。そのうちに砂場の縁に七人ほど母親が腰をおろし、二、三歳の子どもたちが遊びはじめた。私は少し心が落ち着かなくなってきた。後から母親たちの会話が聞こえてくる。「うちの子はカタカナでアイウエオと読めるんだけど、イントネーションはだめなのね」「うちの子は数は百くらいまでは数えるんだけど——」など、次第に声が大きくなる。子どもたちは砂山を小さく盛り上げている。

M郎は立ち上がり、砂場の外に走り出た。ことばを話さないM郎はこういう会話に我慢ができなくなったように思えた。私がこの機会に学校に帰ろうと立ち止まると、強く手を引いて違う方向に行く。私は一方的にどんどん走って入口まで来て、道路に出ようとしたが、杭につかまって進もうとしない。エヘンエーンと大声を出す。私はあきらめ、M郎はどんどん走って砂場に戻った。砂場の場面が気になるのであろう。さっきと同じ七、八人の母親と子どもがいる。砂場の縁の外でM郎はエーンエーンと声を出し、吐きそうな咳をする。人々の視線が私共に集まった。この子はへんな子だという視線。一緒にいる大人は何をしているのだという視線。M郎は左手で自分の頬を強く打ちはじめた。否定的に話されている、その自分は悪い自分だと感じている。M郎は砂を両手で丸く積み、それから左手を砂の中に埋め、私の手をその上に重ねて砂をかけた。それを何度も繰り返した。砂場に落ちていた熊手にも砂をかけて見えな

母 肉 母

くした。頬を打っていた手である。今日は歩いていても、立ち止まって私の手を強く引く。私の手を引いて自分の思うところに連れて行かせるという具合で、私が違う方角に行くとき強く砂場の方に引っ張る。

砂場で自分の左手を埋める、その左手は頬を打つ手である。私の手は引き寄せる手、自分の抛り所とする手である。熊手——この子は欲しいと思っても欲しいと表現しない。他の子たちの遊ぶ砂場で、他の子の物を欲しくても、手を出せば何か悪いことが起こるとこの子は思っている。社会の中で自分が受け入れられていないと感じている。私の心の動揺も感じ取っている。これらのことがこの子を不機嫌にさせている。

砂場で私共に関心を持っている母親が一人いて、何かをしてくれたわけではないが助かった。

M 郎は学校に帰ると、給食の味噌汁を他人の分まで食べた、満足した一日を過ごしたからだろう。M 郎は絵本を抱えて奥の部屋に行った。私の手を引いてそばに座らせる。私が立ち上がろうとすると手を引きに来る。帰りには母親と一緒に私の手を引いて、公園の前の道路を走った。その後姿が孤独にみえた。

最初の日の遠くを眺めていたM 郎の望んでいたのは、この公園のような場所だったのか。そこには良いものもあるし、また、受け入れてくれない社会もある。



この子は幼児期にどのような体験をしていたのか、私は知らない。しかし、この子のうつろな表情、遠くに何かを探し求める目から察すれば、幼児期の自己実現をしていたと言え難い。幼児期に自然の物質である土、水、風、火と親しむこともなかったかもしれない。幼児期がどんなにたいせつかを、いま、私は悟らされている。

また、障害をもつといわれる子どもと一緒に笑って楽しむ仲間の交わりをつくれたら、この子は違った姿を見せただろうと思う。

この頃の日記より

ここに神の恵みが示されているにもかかわらず、そのことに気付かない。

ロマ書1…21から

子ども自身にとつて、育ちつつある体験があるように。それが子どもにとつて何であるかを探りつつ、今日の労働を。